

1. 地域資源としての雪の可能性

今回、私は自然の地域資源として「雪」に注目した。東北地方、特に私住む山形県大石田町は豪雪地帯として知られ、雪による人災、災害、交通網の乱れが頻発し、これをよく「雪害」とも呼ばれるのを耳にする。今回はそういった、地域住民と雪のネガティブな関わりを見直し、雪を利用して、人々の暮らしに貢献するという雪の役割に着目し、「雪室」という雪を利用し作物を生産する手法を例に、雪がその地域での誇れる地域資源、子供の頃を思い出す懐かしさを表す地域資源になるという新たな可能性について考察していく。

2. 山形県の「雪」の現状

山形県大石田町が属する最北地区では、西を出羽丘陵、北を丁岳山地、神室山地、東を奥羽山脈、南を葉山と月山にと、ほぼ四方が山で囲まれており、冬には日本海側（西側）からやってくる雪雲が奥羽山脈にぶつかることで断続的に雪が降り、全国的に見ても積雪が多く、豪雪地帯と言われている<sup>i</sup>。また、庄内地方と言われる日本海沿いの県西部は降雪量こそ多くないが、冬は吹雪く日が多い。また、山形市がある県南の地域では北部、南部の山間部では多いものの、市内の降雪量は最北地区によりはるかに少ない。そういった、気候のもとで山形県では豪雪への工夫、知識を持ちながら生活を営んでおり、また、雪合戦大会や雪まつりなど各地のイベントを通じて雪と寄り添ってきた。

3. 「利雪」の可能性

(ア) 「親雪」の町づくりへ —北海道・沼田町の事例から—

北海道の豪雪地帯の沼田町では雪を利用、「利雪」することを市全体で考え、雪貯蔵庫を設置して、「雪中米」と呼ばれる米の生産によって、地域住民・農家と連携し地域ブランドの農産物売り出している。また、公共施設に夏場は「雪冷房」が取り入れられており、実際に地域住民の暮らしに雪が貢献するという形ができています。小学生には「利雪」学習がなされ、雪を新エネルギーとして考えるということが教えられている<sup>ii</sup>。このように、世代を越えて持続可能な「雪」の町を作りだそうという取り組みから、利雪の町づくりの可能性が見いだせるのではないかと考える。

(イ) 雪室 —山形県大石田町の事例から—

大石田町でも、沼田町と同様に「雪室」という伝統的な雪による貯蔵法を用いている。これによって、冬場、雪の下で育つことにより栄養や甘味がます、「自然薯」を通年で栽培、出荷できるようになり、地域農家の新たな農産物ブランドの生産に雪が貢献し

ている。また雪室という伝統的な手法の再興にも貢献している<sup>iii</sup>。この、伝統的な雪室による保存からは現在と昔ながらの伝統をつなぎ合わせ、地域の伝統を自然薯の生産を通じて全国へ発信するという雪の新しい役割が見ることができる。

#### (ウ) 雪蔵食材の可能性—北海道「雪氷環境プロジェクト」の事例から

先述した、雪蔵や雪室の方法を使えば、コメは古米化せずに8~9年は保つと言われていた。この雪による保存方法の利点は湿度を一定に保てることであるという。そういった、雪蔵で保存したコメいわゆる雪中米、また同じ要領で保存に成功したじゃがいもなどを全国の人々に振舞うというイベントが北海道・札幌市で開催された。このイベントは売るためではなく、米が古米化せずに食べられるというこの雪蔵という雪を用いた保存方法とその食材について発信することが目的であり<sup>iv</sup>、こういった雪による保存システムが人から人、雪のある地域から雪のない地域へ、と伝えられていくことで地域資源としての「雪」が雪と個人以外の新しい繋がりを生み出すことができるのではないかと考える。

#### 4. まとめ—地域資源としての雪の可能性—

以上では、各地の雪を利用したまちづくりの事例を見ることで雪の役割を考えた。ここでは、地域資源としての雪の可能性、またつながりからみる地域資源とはなにかということについてもふれて全体の総括また今後に向けての考察をしていく。

まず、沼田町の雪蔵、大石田町の雪室の事例は、自然薯、雪中米という地域ブランドを生み出すことに雪が貢献した例であると考え。また、雪室という昔ならではの方法を自然薯の生産のために用いることで地域の伝統の再創造、そしてその伝統手法の全国的発信という点にもつながるのではないかと考える。また化石燃料の輸入依存や、原子力発電などエネルギー問題を抱える日本にとって、雪はあらたなエネルギーシステムとして注目され、その導入は大きな課題であると考え。北海道などをはじめとして降雪地域ではこういった雪冷房システムの導入が検討されてはいるものの普及に至らないのはやはり資金面であるという。雪冷房システムなどの雪の有用性ももっと市民の生活に普及するには、こういった技術をさらに発信し、雪がエネルギー面にとって重要な資源であるということを知ってもらうことが必要だと考える。そのためには、先述した、雪室で作った作物を振舞うようなイベントを各地で重点的に行い、地域資源としての雪の役割について発信することが大切であると考え。

以上のように、雪の可能性について考察を進めてきたが、地域資源としての雪をつながりという視点から見てここで再び総括してみると3つの面が考えられる。1つは地域資源がまた自然薯や雪中米など新たな地域資源を生み出すという地域資源どうしのつながり。そして2つ目は、雪室のような伝統的手法を今に蘇らせ、全国に発信するという過去と現在を結びつけるという面でのつながり。そして、雪蔵食材を振舞うイベントのように、生産者、地元の人々とイベントにくる全国の人々との人どうしのつ

ながりとこういったつながりを雪が生み出すのではないかと考えた。そういった、つながりが生まれたとき、雪に対してもはや「害」といったマイナスな感情から、地元を思い出させる象徴的な存在として「懐かしい」という感情や、そして様々な活動が発信されることで地域住民は雪に対して「誇らしい」という感情を抱くのではないかと考える。そういった、地域住民の感情に寄り添った形というのも地域資源にとっては重要であると考えます。

---

i 山形地方気象台

[http://www.jma-net.go.jp/yamagata/kishou\\_tokusei/kishoutokusei\\_top.html](http://www.jma-net.go.jp/yamagata/kishou_tokusei/kishoutokusei_top.html) (2014.1.12)

ii ストップ温暖化「1村1品」大作戦

<http://www.jccca.org/daisakusen/area/hokkaido/> (2014.1.13)

iii 大石田町新作物開発研究会

<http://www.jinenjyo.com/jinenjyo.html> (2014.1.13)

iv 産経ニュース 2013.9.21

<http://sankei.jp.msn.com/life/news/130921/trd13092112010004-n1.htm> (2014.1.13)